

明治・大正期における大阪市街地周辺地域の変容

山中進

一、はしがき

明治中期から大正期にかけては、わが国の産業革命期にあたり、この間東京・大阪・名古屋・八幡（北九州市）などを中心とした各地に多数の近代工場の設立をみた。なかでも藩政期に日本経済の中心地であった大阪は、この時期に綿糸紡績工業を主とする工業発達によって、近代工業都市へ顕著な発展をとげた。

この研究はこうしたわが国の産業革命期に、大阪の市街地周辺地域がどう変容したかを、東成地域を対象に、大阪の都市発達とこの地域の農村を特徴づける農家副業の消長との関連において考察することを目的としている。ここでいう東成地域とは、現大阪市の住吉・阿倍野・東住吉・平野・生野・東成・城東・都島・旭の各地を含み、旧行政区画のうえでは、東成郡の敷津村・安立町と墨江村の西部の一部を除く地域を指している（図1）。

筆者は、先に綿作・綿業の核心地であった八尾地域が、明治中期以降これらの著しい後退と、大阪市街地やその周辺地域における近代工業発達の影響をうけ、それとの関連で地域の変容をみたことを

述べた。⁽¹⁾⁽²⁾この地域を研究の対象とした理由も、(一)東成地域が大阪市

街地と八尾地域との間に位置し、大阪の工業発達だけでなく、都市膨張の直接的な影響をうけ、八尾地域以上に急激かつ著しい変化をみたこと、(二)近世以降明治中期まで、地域の農業は綿・菜種作を主体とした商品作物生産に特徴づけられ、(三)地域的には湿田の卓越する北部の旧淀川・寝屋川流域に菜種作地域、上町台地東側から河内にかけての低湿地に綿・菜種作地域、上町台地やその南部の新大和川右岸に綿作のほか一部蔬菜作地域と、それぞれ特徴ある農業地域を形成し、(四)明治中頃から綿が商品作物としての意義を急速に減じた後は、大阪の工業発達や都市発展と深くかわり、農家副業に変化が生じ地域の変容をみたことによる。

なお本稿では、地域の変容を比較論的に考察することが重要と考え、大阪市街地に隣接し、本地域とは地域的条件を異にする西成地域（西成郡のうち一八九七年以後の今宮・玉出町、粉浜・津守村を除く）との比較においてこれを論ずることとした。西成地域は、(一)北部の中津川流域に陸田が分布し、微高地は主に畑に供され、大阪湾沿岸の新田地帯は水田・畑地が相半ばし、⁽⁴⁾(二)藩政後期から明治中頃まで、北部の中津川・旧淀川流域の町村では米・麦以外、綿・菜種が主たる作物であったが、これらの後退と大阪の都市発達の影響で蔬菜作の伸長がみられ、さらに(三)大阪の工業化が拡大するにつれ、各種の菓製品の製造が農家の副業として広くおこなわれるようになったし、(四)大規模な近代工場の設立もあいつぎ、その影響が東成地域以上に顕著にあらわれた地域である。

わが国産業革命の時期区分については多くの論議がなされている

が、日本経済は日清・日露戦争を画期に、近世的経済構造から近代的経済構造へ編成替えを完了したといえる。⁽⁶⁾そこで本稿では明治二〇年代から大正期までを中心に検討を加えた。

二、東成・西成地域

における農家副業の比較

(一) 明治期における農家副業の比較

東成・西成両地域を農家副業のうえから比較したのが表1である。両地域の農家副業は多様で、種類も多い。そこで論を進めるにあたり、各々の副業について、その起源・内容・性格の検討をおこない、(一)近代工業関連副業、(二)農業関連副業、(三)賃労働的副業、(四)農産加工・手工的副業の四つに分類した。

これによると、明治期西成地域には菓細工・加工の副業しかみられないのに対し、東成地域は近代工業と関連した副業に眼鏡磨が、農産加工・手工的副業に線作にともなう糸紡ぎ・綿繰などのほか、唐弓絃・菅笠・基石・鼻緒・草履・履物表製造などが、賃労働的副業に日雇稼・荷車鞍がみられる。

「農事調査(大阪府之部)」(複製版、一八九〇年)によると西成地域の編繩・苧織などの菓加工について、「従来新庄、北中島村ノ二ヶ村ノミナリシカ近年商業家ニ於テ漸次物品ノ荷造ニ郵重ヲ加

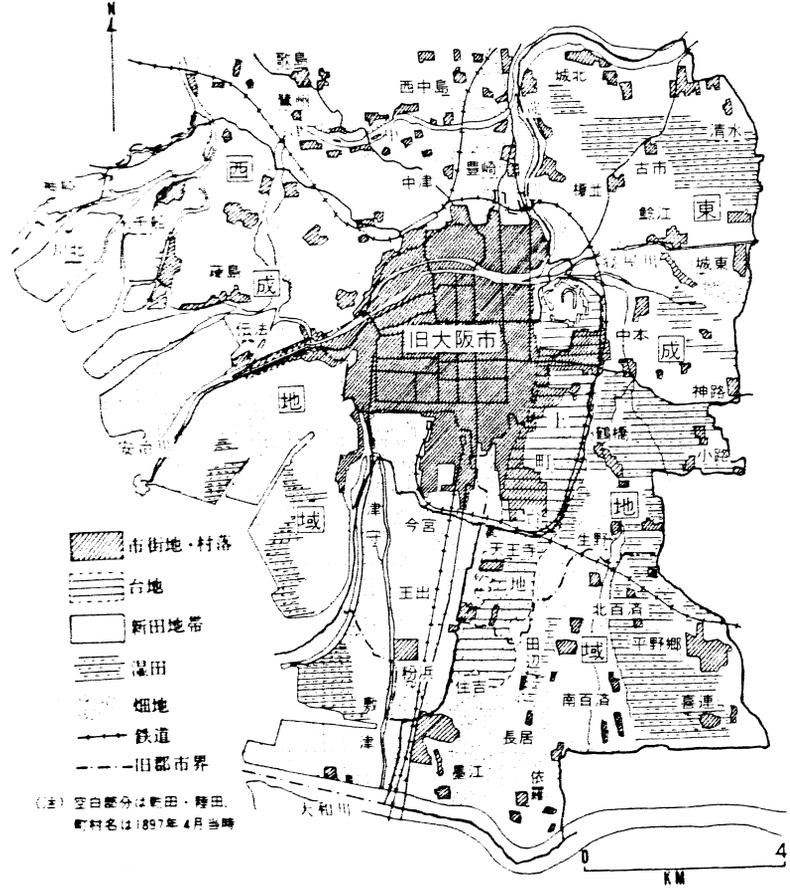


図1 研究地域 (1885年)

フルニ隋ヒ罫罫ノ需用増加シ殊ニ各紡績会社ニ於テ之ヲ使用スル額年々多キヲ加フルヲ以テ益本業ノ隆盛ヲ来シ終ニ隣接ノ村落ニ至ル迄皆此業ヲ営ム」(第三分冊六〇頁) 状況で、これに従事するものも男子約三、三〇〇人、女子約七、〇〇〇人を数えたことを記している。このことから大阪の商業および工業発達が契機となつて、西成地域諸村で広汎におこなわれた副業といえる。

表1 東成・西成地域における農家副業の比較（明治・大正期）

		近代工業関連副業	農業関連副業	賃労働的副業	農産加工・手工的副業
明治期	東成地域	旧東成郡 眼鏡磨		日雇稼 荷車鞍	糸紡ぎ 唐弓絃製造 菅笠 鼻緒 碁石 組纏
	旧住吉郡			日雇稼 荷車鞍	糸紡ぎ 綿繰 草履 履物表
大正期	東成地域	マツチ箱張 プラシ毛植 擦み 眼鏡製造 ガラス 石けん 紙類 鉄工 電 気 製帽 メリヤス タ オル 織物 ガラス玉切	花弁 養鶏 養豚	紡績職工 日稼業 手伝職 青物行商 尿売買 各種袋張	菅笠 碁石 鼻緒 竹籠 皿敷 草鞋 下駄表
明治期	旧西成郡				繩 延織
大正期	西成地域	貿易雜貨品 毛糸綱 貝ボタン メリヤス針製 造	養鶏 甘藷 大根 甘橘	ミシン裁縫	製繩 荷包 組纏 飯器 石灰俵 簾 蓑

資料) 「農事調査(大阪府之部)」1890年(複製版)

大阪府内務部「農家副業成績品展覧会報告」1915年、p.65-67

注) 明治期は1888年頃、大正期は1915年頃を意味する。

旧西成郡には一八八二年(明治一五)大阪紡績会社が三軒家村に創設され、翌年操業を開始したのには始まり以後あいつく近代紡績・織布工場の設立をみ、それにともなった工場地化が進展した。この副業が活況の兆しをみせはじめた一八八七年(明治二〇)から一八八九年(明治二二)間に限ってみても、天満紡績(川崎村)、浪華紡績(伝法村)、今宮紡績(今宮村)、大阪織布会社(九条村)、日本総繰会社(伝法村)、金巾製織会社(川北村)、摂津紡績会社(難波村)などの創設がみられた。

東成地域の農家副業についてみると、「農事調査」は、旧東成郡について「農家餘業ノ多キ事」として、「大阪市街諸種ノ工場及ヒ勞役ノ事業多クレハ本郡小前ノ農民ハ閑隙ノ時ニハ何レモ市街ニ来リテ日雇稼ヲ為ス近時諸工場ノ隆興スルニ從ヒ其需用多キヲ加ヘ……砲兵工廠、綿糸紡績場、燐寸製造場、段通製織其他市街ノ土工等」(第三分冊八三頁)に従事したことが記載されている。これより小作人が大阪市街地とその周辺で、日雇稼や砲兵工廠・紡績・マッチ・段通工場等の賃労働に従事していたことがわかる。また紡績・マッチ工業発達の直接的影響で退屈著しい副業に糸紡ぎ、唐弓絃製造がある。「農事調査」は、「器械紡績ノ起リシ以來唐弓絃ノ需用追々減少シ……糸紡キモ器械紡績ノ為ニ大ニ其数ヲ減シ男子ハ諸工場其他ニ女子ハ燐寸製造其他ノ新事業ニ漸次転業」(第三分冊七七頁)する状況にあつたことを報告し、離農・兼業化の進行とともに農家副業に変化が生じたことがうかがわれる。

東成地域にはこのほか碁石・菅笠製造や眼鏡磨などの副業がみられた。小路村の碁石製造は、一八九五年(明治二八)頃には原料供給と販売を業とする問屋が村内に四戸を数え、輸出の盛況を背景にさかんにおこなわれた。⁽⁸⁾菅笠も明治初期頃まで小路村農家の主要な副業であつたが、麦稈帽・洋傘・日傘などの普及で次第に衰微した。眼鏡磨は「農事調査」によれば、一八八八年(明治二一)当時、女子一三五人、男子二八人がこれに従事していたことが記されている。

東成地域のうち旧住吉郡では綿繰・履物表が婦女子、草履は男子の副業としておこなわれていた。また副業の消長については、「男ハ重ニ耕作又ハ諸製造場稼キ及土工ニ従事シ女ハ綿糸紡績場稼及段

通其他ノ織物ニ従事シ荷車鞍轡ハ毎年十二月ヨリ翌年三四月ノ間農
隙ニ従事シ」(第三分冊九二頁)と記載あることから、旧東成郡と
大きな差異は認められない。

「大阪府誌」第三編(一九〇三年)には、産業革命の進行が著し
かつた一九〇一年(明治三四)当時の農家副業が採録されている。

これによると東成郡には家畜・菅笠・燻寸ノ箱・搾糸・金魚・日雇
袴、西成郡には燻寸ノ箱・苧巻・蠶繭糸ノ糸屋・苧織袴・蚕・蠶・
這・家畜・櫛行季・海・日雇袴などがみられる。このうち注目す
べき副業は、東成・西成両郡の燻寸ノ箱・家畜と東成郡の搾糸であ
る。これらは明治中期以降新たな農家副業として出現をみたもので、
燻寸ノ箱・搾糸はマ・チ・紡績工業の隆盛を反映し、家畜は大阪の
都市成長にともなう周辺農村の対応をあらわす現象である。

(二)大正期における農家副業の比較

西成地域の農家副業は、一部の村に近代工業関連副業や農業関連
副業・賃労働的副業がみられるもの、明治中期に引続き製縄・荷
籠などの製造が広汎におこなわれ、副業の内容に大きな変化が認
められない。これに対し、東成地域は農家副業の種類も多く、ブラ
シ毛種・マッチ箱張・搾糸や眼鏡・ガラス・石けん・メリヤス・タ
オル製造など近代工業と関連した副業のほか、農業関連の養鶏・花
卉栽培など新たな副業の生成もみられ、紡績職工・日雇業・手依職
など賃労働的な副業もさかんであった。(表一)。

表一に示した西成地域の農産加工的副業は、大道・豊里・中島・
新庄・西中島・北中島・神津・歌島・菟島・菟島の諸村でおこなわれ、製
作高は確かに知り難く而も今昔の比較こそ見るを得ざれ、旧来より

も幾倍の多きを示すとも、決して衰へしことなき⁽¹⁰⁾状況であった。ま
た近代工業と関連した副業には千輪村の貿易雑貨品・毛糸縹・メリ
ヤス針・貝ボタン製造などがあり、賃労働的副業に西中島村のミン
ン裁縫がある。農業関連副業では西中島村の養鶏、大道村の大根・
柑橘栽培がみられるが、東成地域は多くの新たな副業の生成をみ
ていない。この理由に西成地域が綿・菜種作以後、蔬菜作が本業と
して著しい伸びをみせたことがあげられる。

一西成郡史一によると、西成郡の蔬菜作の面積は一九〇一年(明
治三四)に七四八町歩であった。一九一〇年(明治四三)には七三
六・六町歩で、この間一一・四町歩とわずかの減少をみている。し
かし前年の一九〇九年の作付面積は八〇八・九町歩であったことか
ら、年々多少の増減をくり返していたものといえる。ただ産額⁽¹¹⁾は、
一九〇七年(明治四〇)の三一七・八七〇円、一九〇八年の三四八四
一七円、一九〇九年の三九〇八四〇円、一九一〇年の三九六一九九
円と着実に増え、鰯州・中津・西中島・豊里・大道・中島新庄・北
中島・歌島・菟島・川北と、かつての綿・菜種作地の諸村が蔬菜生
産の増加著しい地域であったことを記している。

一方東成地域についてみると、近代工業関連副業では、搾糸が田
辺町・平野郷町・北百済村・南百済村・喜連村に、マッチ箱張が依
羅村・喜連村に、ブラシ毛種が依羅村・北百済村・南百済村・田辺
町・鶴橋町に所在していた。「農事調査」中の「農産地図」をみる
と、これらの町村は明治中頃まで、米・麦作のほか、綿・菜種を産
し、当時は綿作核心地の中河内に続く綿作地であった。

河内の綿作農村では、明治中期以降綿作・綿業の急速な衰退にと

もない、マッチ箱・ブラシ毛植・貝ボタン製造・撚糸などの近代工業関連副業が農村の余剰労働力を吸収しつつ普及・定着をしている。東成地域のこれら副業も、河内綿作農村と同様の経緯をたどり普及したといえる。

このほか織物・石けん・紙類・鉄工・電気・メリヤス・製帽などは、北部低湿地の鯉江・榎並の副業として採録されたものであるが、本表作成の資料とした大阪府内務部「農家副業成績品展覧会報告」(一九一五年)には、その実態や内容説明はなされていない。しかし「東成郡誌」によると、一九一七年当時、鯉江町には「工場法」の適用をうける工場に、ガラス製造工場七カ所、鑄鉄工場九カ所、石けん工場二カ所があり、榎並町では一九一二年―一九一八年間にメリヤス工場三、ガラス製造所二、鉄工所一、鑄造工場三などの設立がみられることから、これら諸工場とかかわりをもつた副業と解される。

農業関連副業では、中本町・生野村・平野郷町・長居村で養鶏が、長居村・北百済村で花卉栽培がおこなわれていた。賃労働的副業では、新大和川右岸の依羅村で土工手伝が、墨江村・喜連村・長居村などでは紡績職工が、大阪市街地に隣接した中本町・鶴橋町や東成地域北部の榎並町・榎本村・清水村では大阪市街への手伝職や工場での労働・日稼が主たる副業であった。農産加工・手工的副業では、明治中期以降も菅笠・碁石製造(小路村)が引続きみられたし、鼻緒(神路村)・皿敷(小路村)・竹廉(長居村)・櫃製造(天王寺村)などは限られた村落でおこなわれた副業であった。

三、東成・西成地域における工業発達と都市的發展

(一) 東成・西成地域における工業発達

大阪府の工業は、明治二〇年代以降紡績業の飛躍的發展とこれにつぐマッチ製造業の躍進で著しい成長をとげた。

「大阪府第十八回農工商統計年報」(一九一六年)によっても、一九一五年(明治二八)の大阪府の工場総数六一一のうち、マッチ工業が二三工場、綿糸紡績業が一九工場を数え、これらの工場の多くは旧大阪市や旧西成・東成郡に集中立地したことがしめされている。とくに旧西成郡においては、一九一二年(明治二五)から一九一六年(明治二九)にかけて進出・創設をみた紡績・マッチ工場に限ってみても、紡績工場では朝日紡績(今宮村)、福島紡績(上福島村)、大阪製綿(川崎村)、明治紡績(中津村)、日本紡績(下福島村)、関西紡績(西中島村)、毛斬輪紡績(中津村)、日本細糸紡績(歌島村)が、マッチ工場では電光社(今宮村)と、その数は多い。⁽¹³⁾ 東成郡はマッチ工場では大阪製燧(旧天王村寺)、紡績では平野紡績(旧住吉郡平野郷町)が一九一三年(明治一六)に設立されたが、一九一二年から一九一六年間には野田紡績(鯉江村)の創設をみただけで、西成郡にくらべ際立って少ない。紡績・マッチ工場に限らず、一般に西成郡には大規模工場の進出が著しい。この傾向は、明治末期から大正期にかけても継続し、東成郡との差異は図2によっても明瞭である。

東成地域では、一九一三年城東村に鐘ヶ淵紡績が設立され、一九一七年から一九一八年にかけて城北村で天満織物・鐘ヶ淵紡績淀川工場の創業をみ、これら二村の一工場当たり職工数は多いものの、他の多くの町村でその数は少ない。

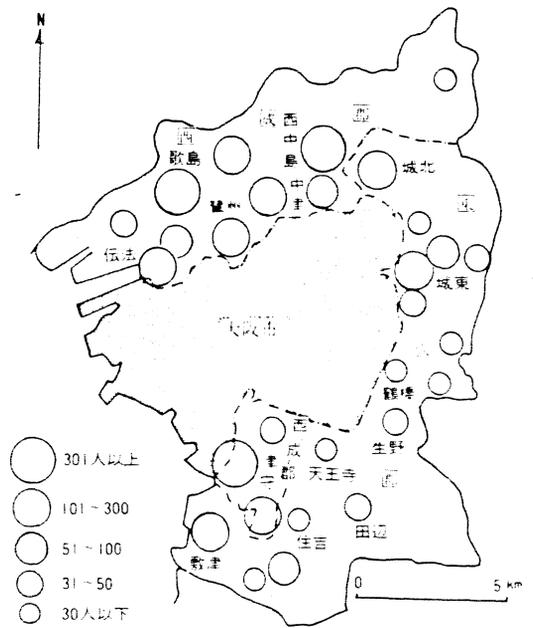


図2 東成・西成郡における1工場当たり
職工数の分布(明治末~大正初期)
資料:『東成郡誌』P.P.205~206
『西成郡誌』P.P.517~520

この他、大阪市街地における各種の中小雑貨工業の発展も、その周辺地域に多大の影響をおよぼした。大阪府立経済研究所がまとめた報告書によると、一九〇四年(明治三七)の一大都市を基盤とした「雑貨其他工業」職工数は、二九、七二六人で、職工総数八〇、八九三人の三六・八%を占め、この比率は当時盛行をきわめた紡績工業の二一、三五一一人(二六・四%)を上回り、その地位が高かったことをしめす。さらに一八九四年から一九〇四年間に、マッチ・ブラン・メリヤス・ワイシャツ・帽子・ガラス・製織・製函・紙製品・革製品等の雑貨工業は、輸出活況の波にのって発展したことを指摘している。またこの工業は大阪市域のうちでも、表2に示すように東区・南区の二区に多く、場所的には南区の難波・島ノ内・高津(日本橋筋)・今宮・天王寺地区、東区の上町・東平野・船場地区に集中す

る。この二区に隣接する東成地域は、こうした条件を反映し、多くの雑貨工場の集積とそれによる工場地化が進み、その実態は、図2に示した一工場当たりの職工数が少ない現象となつてあらわれているといえる。このことは一工場当たり職工数が少ない天王寺・鶴橋・生野の三町村の工場の種類をみても明らかである。「東成郡誌」によると、天王寺村は一九一一年から一九一七年間に創業をみた一〇工場のうち、

表2 大阪市街地内における雑貨工場(1916年)

東区(総工場数566)		西区(総工場数363)		南区(総工場数878)		北区(総工場数927)	
地区	工場数	地区	工場数	地区	工場数	地区	工場数
上北	78	土佐	21	南島	21	都東	1
北中	26	・京町堀	2	船場	46	野田	6
南中	34	・鞍波	16	ノ内	18	東野	28
南三	34	阿新	15	上瓦	9	北野	39
清平	9	北南	10	高津	29	西堂	18
清谷	13	南南	4	日本橋筋	6	中上	7
清東	44	幸島	1	地波	49	下福	5
		松本	1	浜津	3	野川	22
		・岩川	6	宮寺	14	之福	12
		・軒	4	王	27	福野	19
		尾筒	1		26	在	1
		港出	5				
		幸	3				
		西	1				
		日九	1				
計	238	計	92	計	248	計	158

(資料) 大阪市商工課(1917)；『大阪市及其付近の工場分布状態』p.3-8より作成

雑貨工場はガラス・艶張工場が各二、貝ボタン・製帽・セルロイド・玩具製作所が各一で合計八工場を数える。同じ時期、鶴橋町でも一三の工場・会社のうち、ブラシ製造工場三、ガラス製造所二、セルロイド製造工場二、メリヤス工場一であった。生野村にも一九一〇年から一九一七年間に、防水布・瑠璃・製鉄・セルロイド・製燧・歯ブラシ・埵塙・洋燈など、各工場の存在が認められる¹⁵⁾。

(二) 東成・西成地域における都市的発展

表2は産業革命前とその後の中心都市大阪と旧東成・西成両郡における人口変動をあらわしたものである。これによると旧大阪市は、産業革命進行前の一八八一年(明治一四)から産業革命の進行著しい一八九一年(明治二四)の一〇年間に、六六・〇%の人口増加をみている。隣接の旧西成・東成郡は、この間の増加率は四三・一%と三三・一%で、旧西成郡は旧東成郡を上回る増加率をしめす。また一八九一年から大阪市が第一次の市域拡張(一八九七年)をおこなう直前の、一八九五年(明治二八)のわずか四年間に限ると、旧西成・東成二郡の人口の伸びは、それぞれ二〇・四%と一三・二%で、旧大阪市のそれを大きく上回り、旧西成郡の増加率が大きい。このことは明治二〇年代前半まで、旧大阪市での工業立地および都市的発展がすすみ、人口集積が激しかったものの、その後は旧大阪市に接続する旧西成・東成郡で、前述した紡績・マッチ工業を中心とした工業発達や大阪の都市発達にもなる人口集積が進んだ結果といえる。なかでも旧西成郡は、大規模工場の進出著しく、旧東成郡を上回る人口増加をみている。

大阪市域をこえた急速な市街地の拡大とその周辺で多くの工場の

表3 旧大阪市と東成・西成両郡における人口変動(1881・1891・1895年)

	旧郡区	産業革命前 1)	産業革命前期 2)		産業革命進展期 3)	
		1881年(明治14)	1891年(明治24)	増減率	1895年(明治28)	増減率
大阪市	東区	65,812 人	117,999 人	79.3%	117,686 人	-0.3%
	西南区	87,240	135,820	55.7	146,284	7.7
	南区	85,850	145,137	69.1	132,767	-8.5
	北区	52,184	84,222	61.4	91,929	9.2
	計	291,086	483,178	66.0	488,666	1.1
東成郡	西成郡	110,878	158,646	43.1	190,956	20.4
	東成郡	49,498	72,162	45.8	84,250	16.8
	住吉郡	27,348	30,107	10.1	31,559	4.8
	計	76,846	102,269	33.1	115,809	13.2

資料) 1) 大阪府:「大阪府治一覽概表」1882年

2) 大阪府内務部「大阪府第14回農工商統計年報」1893年

3) 大阪府内務部「大阪府第18回農工商統計年報」1897年

註) 1891年の増減率は1881年～1891年の10年間、1895年のそれは1891年～1895年の4年間のものである。

成立をみるにいたって、大阪市は一八九七年(明治三〇)四月、第一次市域拡張を実施している。旧西成郡は伝法川以南から木津川沿岸におよぶかつての新田地帯をはじめ、大阪市街地南部の難波村、今宮村の一部、その北部の北野・曾根崎・上福島・下福島、それに川崎・野田・豊崎村の一部におよぶ範囲で、大阪港・大阪駅と大阪市街地に接する工場・農業地域が新市域に編入された。旧東成郡は大阪市街地と接続する西高津・東平野・清堀・玉造の各町村、都島・野田・本村の一部、それに大阪鉄道東線の線路を境に大阪市街地側の多

くの範囲が編入された。⁽¹⁷⁾

明治末期から大正期の、大阪市街地周辺の変化は著しいものがあった。大正初期には大阪市街地中心部の北区で、人口絶対数の減少をみ、人口の空洞化現象がはじまり、市街地周辺の諸地域では急速な人口増加をみている。⁽¹⁸⁾一九一二年から一九二四年間の東成・西成両郡の人口増加率をみて(図3)、大阪市街地東部の東成郡鶴橋町・生野村、市街地南部の東成郡天王寺村、西成郡今宮町で四〇〇%以上の増加をしめし、なかでも鶴橋町の増加は大きい。この間の増加率は六〇・八・七%の高率で、以下生野村の四九四・七%、今宮町の四八九・二%、天王寺村の四〇七・九%の順となっている。

東成地域の鶴橋町・生野村では、住宅地化の進展、各種雑貨工場

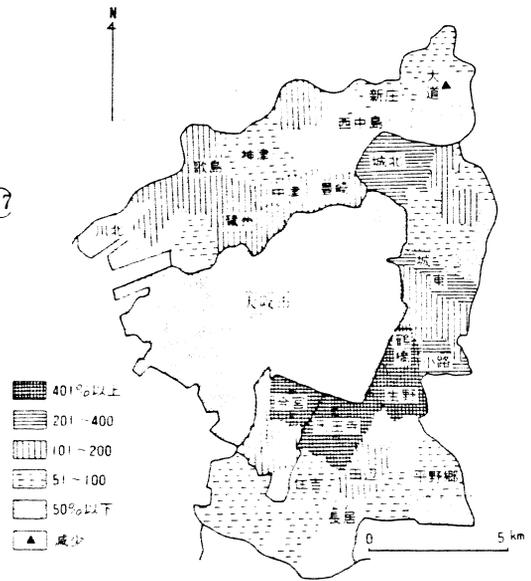


図3 東成・西成郡における人口増加率(1912~1924年)
資料: 大阪市役所『大阪府城址擴張史10 周年記念』1935年

王寺村では、上町台地を中心に一八九七年(明治三〇)頃から桜郡の進出、高級住宅街の形成がみられ、明治末期から大正期には天王寺以北の市街地化が完了している。上町台地とその周辺の土地利用の変化、都市化の実態はすでに詳しく報告されているため⁽¹⁹⁾ 詳述はしないが、明治末期から大正期にかけて、大阪市街地東部や上町台地の都市化は顕著であった。

東成地域は、このほか明治中期以降に大規模工場の進出をみた城北村、大阪市街地と接する城東村、鶴橋町の東側に位置する小路村でも、一九一二年から一九二四年間の人口増加率が二〇〇%以上で、とくに大阪電気軌道沿いの小路村は、三三二・七%と高く、鶴橋町よりさらに外延に市街地の拡大が進んだことをしめす。

四、大正期の東成地域における農家副業の実態

前述したごとく大阪の都市膨張の影響をうけ、明治末期から大正期の東成地域は、北部の低湿地で工業化による地域変化が激しく、大阪市街地東部、上町台地で工場・住宅地化ともなり市街地形成が急であった。ここでは大正期における東成地域の農家副業の実態を、先に四つに分類したもののうち、都市化と関連の深い近代工業関連副業、農業関連副業、賃労働的副業をとりあげ、東成郡役所編「東成郡誌」(一九二二年)を主たる資料に検討することにした。

ただ、同郡誌には郡内すべての町村の副業を記載しているわけではなく、またその記述も各町村により精粗の差がある。それ故すべての町村について副業の検討をすることは困難で、ここでは特徴ある町村を中心に考察をおこなった。なお、とくに注記のない統計数値・引用文・諸事象は、「東成郡誌」によった。

大正期の東成地域における農家副業の実態を図示したのが図4で

容の要因が生起しつつあったことも見逃せない。このほか大和川右岸の依羅村では、農閑期を利用し、天下茶屋・住吉・堺方面への手伝職があった。

大阪市街地東部は、各種雑貨工業の進出で、これと関連した多くの副業がみられる。鶴橋町のマッチ箱張・ブラシ毛植・貝ボタン・ガラス玉切りなどがそれである。大阪鉄道東線と大阪電気軌道が交差する鶴橋は、明治末から大正期にかけて、前述したごとく住宅・工場の増加が著しい。一九〇九年の職業戸数をみると、総数一三九六戸のうち、商業一一一戸、工業四〇戸、農業二一一戸、その他七〇一戸、無職三二九戸であった。これが一九一八年には、総戸数が六、五三〇戸に増え、その内訳は商業七七〇戸、工業六七七戸、農業一一二〇戸、その他四、〇〇五戸、無職九五八戸で、この間商工業の際立った成長と住宅地化の進行をよくしめている。

鶴橋町の一九一七年の主要工産物は、メリヤス・刷子及刷毛・金屬製品・石けん・セルロイド製品・医療機械薬品及売薬・ボタン・防水布合羽などである。とくにブラシ製造業は、東平野・谷町・上町・鶴橋・天王寺が主たる製造地であったし、貝ボタンも一八九四年から一八九五年頃の輸出の伸長で全盛、天王寺付近に集中した。これらの工業発達との関連で多くの副業が生じたといえる。

ブラシ毛植・マッチ箱張・擦糸などの副業は、かつての綿作・綿業地域に普及・定着したものである。マッチ箱張は、大正期にはマッチ工業の凋落で衰微し、副業としてその意義を失いつつあった。ブラシ毛植も大正期には、各種植毛機械の開発が進み、毛植部門が専業化の傾向にあったが、南百済・依羅・田辺などの町村でおこな

われていた。

依羅村では、「主として婦女子の内職として各戸殆んど従事せざる家無き程」(一四九五頁)の状態であったし、南百済村でも一九一五年当時、農家戸数二九二戸のうち、一二〇戸(四一・一%)の農家がこれに従事していた²⁰。大阪の市街地拡大の影響を比較的うけることの少ないこれらの農村で、綿作・綿業衰退後の農村全業労働力に指向し進出・定着した副業の分布をみることは、かつての綿作・綿業地域の特徴を色濃く残していることのあらわれである。

擦糸は、綿作核心地であり、周辺農村の物資集散の地であった平野郷とその周辺の諸村でみられる。平野郷は一八八九年(明治二二)大阪鉄道が湊町・柏原間に開通し工業化が進んだ。大正期には平野擦糸(一九一三年)、丸喜擦糸(一九一四年)、平野織布(一九一五年)、大阪製網(一九一七年)の設立あいつぎ、東大阪の長瀬と同様に、綿作・綿業地を基盤として、擦糸・綿糸業の伸長をみた。農家副業の擦糸は、かかる条件を背景に普及した。この副業は、貸出者周辺の農家でおこなわれる傾向にあつて、これも先の副業とともに綿作・綿業地域の特徴をしめすものといえる。

生野村の眼鏡レンズは、「大正二年頃より質逸製品ノ輸入絶エルト共ニ漸次之ヲ模造製作シタルニ相當優品ヲ得現在ニ於テハ品質、支那方面ニ多少ノ輸出ヲ見、益々隆盛ニ向ヒツツ」ある状況であった。一九一七年当時、眼鏡レンズ製造に従事する者は二五七人、生産量三七五、九〇〇打(二、四、三〇〇円)で、一九一九年には従事者数三五〇人、生産量が四〇〇、〇〇〇打(四八〇、〇〇〇円)をあげ、盛況であった。

花卉・養鶏・蔬菜など、農業関連副業は、生業的性格がきわめて強く、大阪の市街地化の進展によって、その近郊村で一般におこなわれた。

上町台地の東南部に位置する長居村では、「近年大に發達したる園藝作物は従來副業的に試作せられし者なるが大阪市堺市及市接統町村の發展と共に需要の増大を來たし、往年の綿作地は今や全く園藝作物地と變じたり」（一五三三頁）で、かつての綿作地から園芸作物地域に変容する状況を記している。同村の「大正七年九月調査主要草花表」（一五三四頁）から、一〇反歩以上の作付を有するものをあげると、夏菊・日々草・千日紅・日廻菊・秋菊・金錢花・菖蒲などがある。農家戸数四五九戸のうち、園芸農業を主とする戸数は二一一戸（四六・〇％）にのぼった。

生野・田辺・中本・長居など、大阪市街地の東部から南部の町村でおこなわれていた養鶏も、天王寺村では、「明治二十五年頃より大字阿部野に於て次第に其飼養数を増し、農家の副業となり、同三十年頃專業者を出すに至れり。現今十戸の專業者あり。一戸にて多きは千羽を越ゆる者（三戸）あり、少なきも百羽を養ふ」（四〇六頁）状況であったし、生野村で一九一五年に五〇羽以上を飼養する農家が六〇戸を数えたが、一九一七年には一〇八戸に増加し、都市化によって大阪近郊村で活況を呈した副業といえる。このことは、生野村の農家戸数が一三二戸（一九一七年）のうち、実に八一・八％に当たる農家が養鶏を営んでいたことからもうかがわれる。

蔬菜作は、住吉村で、「綿の栽培廃絶し蔬菜の之に交わるに及び……米麦の栽培の外、胡瓜・茄子・西瓜・南瓜等をはじめ、大根・

蕪・水菜の類盛んに栽培」（一六二九頁）されたが、大正中頃すでに市街地化が進み、農業自体後退の状態にあつた。新たな蔬菜栽培地は、上町台地を南に下り、住吉村の西側新田地帯の敷津村に移り、それも本業として成長著しかった。

五、まとめ

明治中期から大正期は、わが国の産業革命期にあたり、大阪では急激な近代工業の發達とそれによる都市的成長がみられた。この影響で、大阪市街地周辺地域の変化もきわめて多様であつた。

西成地域は、東成地域以上に大規模な近代工場の集積と、それによる工場地化が進展した。農家副業を通してみれば、農産加工的な各種の製製品の製造がおこなわれ、大正期においてもそれが盛況をきわめ、その内容に大きな変化が認められなかつた。これには明治中期以降綿・菜種作の衰退後、いち早く蔬菜作の伸長をみたことが強く関係しているといえる。

他方、東成地域は農家副業の種類も多く、その分布に地域的な特徴がみられた。つまり低湿な旧淀川・寝屋川流域の町村では、菜種作を主体とした農業から、明治中期以降の急激な大小工場の進出による工場地化の進展で、職工・労働を中心とする賃労働的副業を通じて地域の変容をみ、大阪市街地東部の鶴橋・生野では、大阪市街地における雑貨工業の發達とその直接の影響をうけ、多くの近代工業関連副業が所在し、さらにかつての綿作地農村は、大阪の都市發達の影響をうけることが比較的少なく、河内農村と同様、綿作・綿業の衰退後の農村余剰労働力に指向したプラン毛植・マッチ箱張のほか、

綿業と関連した燃糸が副業として存在し、かつての綿作・綿業地の特徴をよくあらわしている。

高燥な上町台地上は急速に都市化が進展し、その周辺町村は生業の性格の強い養鶏・花卉・蔬菜など農業関連副業がみられた。

(立正大学文学部)

注

- (1) 宮本又次編 『近畿農村の秩序と變貌』有斐閣、一九五七、二三九頁
- (2) 山中 進 一大阪における近代工業の發展と八尾地域の變容』『立正大学文学部論叢第五九号』一九七七、九九一―一二六頁
- (3) 山中 進 「明治・大正期の農家副業からみた八尾地域の變容」『人文地理二九の六』一九七七、一―二七頁
- (4) 大阪市農業団体協議会 『大阪市農業誌』一九六六、七四―七五頁
- (5) 大石嘉一郎編 『日本産業革命の研究(上)』東京大学出版会、一九七五、一二―二八頁
- (6) 宮本又次編 『日本經濟史』青林書院新社、一九七七、一八五―一八六頁
- (7) 西成郡 『西成郡史』一九一五、五一―一頁
- (8) 大阪府内務部 『農家副業成績品展覽會報告』一九一五、九一頁
- (9) 大阪府 『大阪府誌第三編』一九〇一、五二四頁
- (10) 前掲(7) 四四九頁
- (11) 前掲(7) 四四一―四四二頁
- (12) 東成郡役所 『東成郡誌』一九二二、九二二―九二四頁
- (13) 前掲(7) 五二二―五一四頁
- (14) 大阪府立商工經濟研究所 『發展過程よりみたる大阪工業とその構造』一九五二、三六―四三頁
- (15) 前掲(12) 四〇九―四一〇頁、四九五―四九六頁、五六六―五六九頁
- (16) 岸本 実 『日本の人口集積』古今書院、一九六八、五―六頁
- (17) 大阪市役所 『大阪府域擴張史一〇周年記念』一九三五、一―一七頁
- (18) 青野寿郎・尾留川正平編 『日本地誌一五、大阪府・和歌山県』二宮書店、一九七四、九三頁
- (19) 前掲(18) 一七九―一九五頁
- (20) 前掲(8) 一〇三頁
- (21) 大阪府内務部 『府下農村における副業的加工業の概況』一九二九、一四四頁